

## 「 高橋へのありがとう 」

2011-6-17 遠藤俊一

### 1 人生は思い出づくり

高橋和夫が定年退職になった。高橋といえば、私が新入社員教育をした第1期生である。オイルショック後の不況のあおりで自宅待機をお願いし昭和50年5月に入社になった。男子8名女子2名合計10名の新入社員であった。それから36年、“大過なく勤め上げ”この5月に定年退職した。ありがたいことである。

ありがとうと口で言うのは簡単だ。思いを形にしたいなと思った。私は常々思っている、人生は思い出づくりだ。高橋は36年間東信一筋で歩んできた。そこにはいろいろな思い出があっただろう。その締めくくりとなる思い出づくりを手伝ってやろう。そして、思い出づくりだけではない。そこには彼の第2の人生のスタートラインだという意味にもふさわしい楽しい企画にしたいと思った。

### 2 旅のきっかけ

東信システムハウスによって5月8日に彼の慰労会が新百合ヶ丘で開かれた。私は彼のとなりに座った。彼のプロフィールとして青森東信ソフトの前身「八戸技術センターの初代所長です」という紹介があった。私は彼に聞いた、

「帰任してから八戸に行ったか」

「いいえ、一度も」という返事が返ってきた。

「今どうなっているのか、一度行きたいだろう」

「ええ、行きたいです」

「よしっ、わかった」

かくて今回の「八戸、十和田・奥入瀬、弘前 思い出づくりの旅」が始まった。

### 3 日程作り

高橋と私の都合に合わせて6月14～16日と決めた。何をやるか。八戸では種差海岸で芝亭の“うに丼といちご煮”を食べる。次に、八戸近辺での観光地といたら、まず十和田湖が上げられる。もう26年ほど前であろうか、私の息子がまだ小学校5年生の時、私達家族は東北旅行をした。その時、十和田湖に寄り奥入瀬溪流を歩いている。十和田湖の子ノ口から石ヶ戸までおよそ3時間半の道のりだ。最近の新聞にベストテン特集があった。溪流の部でいつもナンバーワンになるのは奥入瀬溪流だ。この時もやはり奥入瀬が1位であった。もう一度

行ってみようと思っていた最中の高橋との会話だ。奥入瀬を歩こう、瞬時に決まった。



帰りは三沢から飛行機かな。ならば、古牧温泉を入れられないか。まあいい、島田に日程を作らせよう。

かくて、青森東信ソフトの島田社長に電話して頼んだ。

すると返事が来た。

「高橋さんが弘前で津軽三味線居酒屋に行きたいと言っています」

「いいじゃない、メインゲストの望みだから、入れよう」

「すると、古牧温泉には行けません」

「えっ、しょ、しょうがない、古牧温泉は諦めよう」

「弘前まで行くとなるともう一日必要です、帰りは青森空港からです」

「いいじゃないメインゲストの望みなんだから一日早めて13日に出発しよう」

「ところで君は付き合えるのだろうね」

「それが、あの、仕事が、そんなに長く、あの・・・ちょっと・・・」

「わかった」

#### 4 同行者

私は思った。いくら私がざっくばらんで陽性だったとしても、高橋は4日間も私と二人きりじゃ息が詰まるだろう。すぐに、システムハウスの代市社長のところに行った。彼に同行と大蔵大臣を頼んだ。いや、今は財務大臣か。

日程と同行者を高橋にメールした。

すると、島田から連絡が来た。

「高橋さんが私も来いと言っています」

「どちらでもいいよ、君の都合でやって」

結局、島田も行くことになった。どうやら、高橋は私と代市Pに挟まれては息苦しいと考えたのだろう。まあ、いいじゃない、4人ならなお賑やかで楽しいよ。

## 5 高橋初代所長

6月13日(月)19:00から懇親会が始まった。八戸のいつもの“いわし屋”だ。先ほど青森東信を訪れた時に降りだした梅雨の雨はまだ降っていたが、青森側が6名、我々が3名で合計9名での高橋慰労会だ。青森の島田を除いた5名は阿部島、宮川、加賀、小野田、境で、みな高橋所長時代に入社した連中だ。もう、20年近く勤務している。そんなに長く東信グループで働いてくれたんだ。この地にこんなにあたんだ。感謝した。しかも、みんな高橋になついている、親しんでいる。高橋の3年間の働きがそこに見えた。ありがとう。



そういえば事務所を訪れた時、飾ってあった“八幡駒”と“サボテン飾り鉢”が懐かしかった。“八幡駒”は当時の八戸の中里市長が歓迎の意味をこめて市長室で私にくれたものだ。“サボテン飾り鉢”は三角体の容器に砂混じりで観賞用のサボテンが植わってあるものだ。サボテンはもう枯れてなくなっているが容器と砂と縞馬が残っていた。開所の引き出物に何をしようかと悩んだ末に決めたいわく付のものだ。高橋所長も悩んだ思い出の品でもあるはずだ。そうそうあの時、開所式が終わって上野まで戻った時、お手伝いで一緒に行っていた新人女子社員の清水さんが私に別れ際に「社長は本当になんでも一生懸命やっているんですね」と言ってくれたのを思い出した。美味しいことだけはよく覚えているもんだ。こういうこともみな高橋所長としての勲章でもあろう。またまたありがとう。

翌朝、ホテルの朝食会場で高橋と一緒にあった。夕べの彼らの採用時の話とか、彼らの精勤振りを聞く。遠い八戸の社員の話は私には良くわかっていない。こうして時に訪れ彼らを知り、彼らの言うことを聞くのは本社筋の幹部としては大切なことだ。と同時に彼らにとっても本社への重要なアピールの機会を持ったことになる。本社長にもよく言っておこうと思った。また、高橋と青森東信の経営、今後のあり方などを話す。こういうときに良いアイデアが出てくるもんだ。

## 6 種差海岸のうに井

車に乗り八戸視察に出発。まず八戸IP（インテリジェントプラザ）に行く。八戸に進出を決めた時、最初の候補地になったところだ。市の誘致先でいい条件であったが、交通の便がいまひとつで断念したところだが、なぜかいつも気になって折に触れて訪れている。IPも隣接の工業団地もいまひとつの賑わいはないようだった。

次に海岸線を、埋立地街区、魚市場、蕪島と回る。東日本大震災ではテレビに八戸がずいぶん映った。復旧が既になっているという印象だ。ところどころに津波の痕跡があるが、島田が説明してくれるからわかるという程度で、もう立ち直っているんだな、良かったなという印象だ。蕪島で公衆便所が土台から傾いて残っているのが唯一の痕跡か。記念にとっておくんじゃないかという冗談が本当のように聞こえた。

種差海岸に到着する。ここで運転手さんとはお別れだ。運転手さん、なんと、昨晚の二次会で入ったスナックのママさんだ。島田の馴染みで、今日の足に困った拳句の助っ人だった。こんなことにでも島田の八戸単身赴任7年の歳月を見るような気がする。何とかしなくっちゃなとも思った。

目指す“芝亭”に入る。八戸にきたら種差海岸の芝亭でうに井を食べるんだ。私の口癖だ。先に入っていった人たちがみんなすぐに出てくる。今日、芝亭は休みだそうだ。だが、島田の裏技があった。東京からどうしても種差海岸の芝亭でうに井を食べたいというお客さんが来る。ぜひお願いしたいと前もって頼み込んでいたという。芝亭は我々だけに今日の昼食を提供した。玉子でとじた“うに井”と、あわびとうにの磯の香汁である“いちご煮”を我々は舌鼓を打って残らず食べた。う～ん、余は満足じゃ。



「種差海岸駅」で1時間ほどまって電車で「八戸駅」に行く。ローカル列車も楽しいものだ。

## 7 奥入瀬溪流ホテル

八戸駅を出発したバスは途中十和田市の道の駅に小休止。ここは元は「三本木」という町だ。糠塚、高坂、桜井でインターハイ卓球団体戦を優勝した三本木高校のあるところだなと卓球バカの私にはいいところで止まってくれたもんだ。

「焼山」に着いた。今日の宿泊地「奥入瀬溪流ホテル」はバス停のすぐ隣にあった。このホテルは奥入瀬溪流沿いにある唯一のホテルというのが売り物だ。岡本太郎作の暖炉があるラウンジを通り部屋に入る。すぐに窓の外を見る。

「おお、いい眺めだ」みんなの口からついて出た。

“そりゃそうだよ、溪流沿いの部屋はプレミアがついて高いんだぞ”とは自分の心内だけでつぶやいた。

食事前に遊歩道を歩き、つり橋と小っちゃな滝を見物。



さらに宿のマイクロバスで別館の露天風呂“八重九重の湯”に送ってもらう。実に露天風呂としての趣ある風呂だった。

ただ男女混浴で湯浴み用のシャツ、パンツをはかなくてはいけないのが一寸興ざめだった。相方は一組の壮年夫婦だけだった。

湯のすぐ前に九重の滝があった。なかなかいい。

「おい、九重の滝はどこなんだ」

「ないね、どこだろう」

後で聞くと、九重の滝しかないそうだ。ネーミングはフィーリングでつけたのだろうか。

「一番下の段をはずして上をみりゃ八重になるよ」

「そうだね、そうしよう」

夕食はちょっとはずんで「和食膳」

創作会席膳とでもいうのだろうか、味も風情もある。

売り物は“三種の肉”だそうで相棒達いわく「ほっぺたが落ちそう」



細長い皿に小さくふた切れつつ三種盛り合わせてあるが、とりわけ真ん中にあったものは、地元産で生産量が少ないため流通ルートに乗せず、ここだけでしか食べられないものだそう。とりわけ高橋の顔はただでさえ細い目をさらにつぼめて幸せそのものだ。私だけは肉嫌いなので魚を頼んだ。立派なのが二皿もきた。

「ということは、あの肉、そんなに高いのか」

## 8 奥入瀬溪流と十和田湖

翌朝、味十分のバイキングで腹を満らし、タクシーで少し上流の「石ヶ戸（いしけど）」に行く。いよいよ奥入瀬溪流トレッキングだ。

26年前は十和田湖の「子ノ口」から「石ヶ戸」まで下ってきた。

今回は反対コースで上がってゆく。

でも最初は少し下って「三乱（さみだれ）の流れ」を見に行き、そしてUターン。

「石ヶ戸」、「馬門岩（まかどいわ）」、「阿修羅の流れ」とポイント、ポイントを見ながら、さして勾配を感じさせない程度の上がり遊歩道を歩く。



「九十九島（つくもしま）」が見つからないまま「雲井の滝」に着いた。1時間強歩いたのであろうか。

ここでバスに乗る。島田の苦心の計画である。全部歩くと3時間半から4時間かかる。日程と体力の心配からここでバスに乗り、一挙に十和田湖に行く。そこから遊覧船に乗り、「子ノ口」まで戻る。昼食をとり「子ノ口」から「雲井の流れ」まで1時間半ほど降りてくる。

私などとても出てこない案である。まあ、足弱もいるからいいか。

終点は「休屋（やすみや）」である。十和田湖では一番賑やかなところ。が、人があまり

見えない。6月中旬とはいえ山の中は寒い。それでもソフトクリームを食べるぞ。食べながら、十和田湖では定番の「乙女の像」を見に行く。10分ほど歩いて高村光太郎作で顔は奥様の智恵子をモデルにしている。すぐ戻り、遊覧船の出航には間にあった。

一番前の展望室には男女一組と我々。途中で彼らは他の場所に移っていったからもう貸切室になった。殿様気分の50分だった。



ついた子ノ口で昼食だ。三軒ほどのレストランがあるが、案の定、呼び込みさんに引っ張られる。一番近い店だった。まあ、どこでもいいよ、一寸寒いね。

昼食は「奥入瀬定食」を頼む。十和田湖っていったらなんたってヒメマスだ。ヒメマス定食にきりたんぼ鍋をつけたのが奥入瀬定食だ。御膳が運ばれてくるとみながいっせいに箸をつけたのはきりたんぼ鍋だった。なんせ寒い。十和田湖は山の中だもんね。ヒメマスの塩焼きも食べ、ワカサギの甘露煮も食べ、う～ん、お腹。いっぱい。

腹もいっぱいになったし、それでは再び奥入瀬トレッキングだ。ちょっと小雨の中を出発。代市Pが私にヤッケを貸してくれた。雨にも寒さにもこれでオーケーだ。

「子ノ口水門」、「万両の流れ」、「銚子大滝」、「九段の滝」、「双白髪（ともしらが）の滝」、「不老の滝」、「白糸の滝」、「白絹の滝」と過ぎてゆく。



一目四滝というが、どう見ても四つ一緒には見えない。ぶつぶついいながらも目的地の「雲井の流れ」のバス停に着いたといたいたが、迷った。渓流道のすぐ上にあるバス道に出たがバス停がない。いったん上に戻り、いやこっちではないとUターン。しばらく下ってゆくと、やれやれバス停があった。

実は私、そろそろ足の指が悲鳴をあげそうだったので、やれ安心。

## 9 青森へ

バスで新青森に向かう。焼山から八戸に向かう道と分かれて八甲田山麓を通る。薦温泉、酸ヶ湯（すかゆ）温泉、に停まってゆく。秘湯特集には必ずでてくる名湯だ。風情のある湯治場という風評の通り何かいいね。八甲田ロープウェイ前を通った時には、かって冬、雪の中、島田と井上雄次さんとで来たときのことを思い出した。強風でロープウェイが休止、しかたなくラーメンを食べて帰って行った。

青森市内が近くなった。見たことのある場所だった。「ねぶたの里だ！」高橋が八戸所長だった頃だ。お客さんの青森NECソフトウェア（青森NES）さんの開所式に呼ばれ高橋と一緒に参加した。その帰りに彼が案内してくれた。東北三大祭の“青森ねぶた”の展示場所だ。閑散としたねぶたの里を高橋と二人で歩いたもんだ。

島田社長になった時、彼の設定で八戸の三社大祭を見て、次に青森ねぶたを踊ったことも思い出す。あの時は女房も一緒に衣装でラッセラー、ラッセラーとはねたな。

## 10 弘前・津軽三味線

バスは新青森駅に到着。新幹線でなく在来線で「弘前駅」に。駅前の「ルートイン・弘前」にチェックイン。ルートインのチェーンホテルは大浴場があるのが売り物だ。一風呂浴びて高橋御希望の津軽三味線居酒屋に行く。歩いて5分かからないかの距離のライブハウス「山唄」だ。ちょっと特徴ある建物の二階にあがる。細長いフロアの先に舞台がある。U字型のカウンター席に向かい合って二人ずつ並ぶ。どうしたって高橋は私や代市氏のそばには来ない。島田と仲良く並ぶ。

ビールを飲んで郷土料理をつまむ。お客さんも適当に入っている。出張のついでに来たらしいビジネスマンや地元客らしい人たちやら、喧騒がちょうどいいくらいに雰囲気盛り上げ、いよいよお待ちかねの津軽三味線演奏だ。いままで料理を運んでいたお兄さんやお姉さんが津軽三味線弾きに早代わり。特徴のあるテンポの速い三味だ。十日前に赤坂の高級料亭で赤坂芸者の踊りを見た。その伴奏をしていた本格的三味線とは別物のようだ。同じカラオケでも歌う人が違くと全く別物になるが、津軽三味線は別境地を開いたようだ。その努力は買うし、これもいいが、私はどちらかといったらあの風情ある本格三味線がいいななどと考えていた。

ふと、高橋を見る。ありゃ、目がないぞ。うれしそ～だね～。よだれまでは出てないけど幸せそのものだね。あ～あ～写真などパチパチとって。ミーハーだねこりゃ。でも、人が喜んでいる姿って、なんていったっていいよ。特に今回は彼がメインゲストだもの。設



定したものにすりゃ何よりの反応だね。ありがとうね。よし、演奏者達との記念写真を撮らそう。演奏が終わりかなりのお客が帰った時、店に申し出た。舞台上で奏者と一緒に記念写真を写させてくれ。快く引き受けてくれた。高橋が舞台上に上がる。まだ奏者は来ていない。よし、それでは、

「高橋、三味線を弾け！」 彼、うろろうしている。

もういちど

「いいチャンスだ、それ弾け」

高橋が横においてあった三味線を持つ。

「重いですよ、これっ」

それでも恐る恐るチリンと弾く。音が出た。もう一度、ジャラン、ジャランと弾く。うまいじゃん。そうこうしているうちに奏者が集まる。津軽三味線を持った高橋を真ん中にはいいパチリ。もう、高橋のでれっとした顔。いやもとい、幸せそうな顔。ここに来て本当に良かったね。



その夜、ホテルのベッドに横たわり高橋の笑顔を思い出しプランナーとしての喜びを感じていた。やってよかったな～・・・。

と、そのとき、私のいたずら心がまたむくむくと動き出した。

あんなに喜んでくれたんだ、もっと喜ばしてあげよう。

もっと思い出を形に変えてやろう。

この旅を紀行文にしてやろう。

みんなに紀行風感想文を書かそう。

そして、ミニ文集にするんだ。

題名は「四人のありがとう」だな。

明日弘前城でみんなに言うんだ。

夜は更けていきました。

## 11 弘前城

翌朝、タクシーで弘前城に行く。ここは高橋も、島田も、私も来たことがある。ただ一人、代市Pだけが行ってない。しょうがない、彼に付き合おう。

降りたところに何か暖簾がたれている。何だ、アイスクリームだ。私が黙っているはずがない。全員がアイスクリームをなめる。こういうところでの立ち食いはなんとも言えず美味しい。もう、弘前城などどうでもいいんじゃない。



弘前城は桜で有名だ。でも歴史的には南部藩の支配下であった大浦為信(後の津軽為信)が津軽藩を独立させた。だから今でも、南部と津軽は仲が悪い。私が蒔田を行っても皆は知らん振り、ぜんぜん関心がないみたい。こんなことを話していたら弘前工業高校を見下ろす場所に寄らずじまいった。弘前工業高校卒業者といたら我が東信システムハウス社員がずいぶんいる。工藤清友以来毎年のように入社していた。私がそういと高橋が今でも田中寿ちゃん、高木君などががんばっていてくれるという。総務部門を熟知している彼ならではの発言だ。

弘前城を出て「ねぶた村」に入った。ねぶた祭りの説明を案内人がしてくれた。終わると太鼓をたたきたい人は手を上げろという。「は~い」、もちろん、真っ先に私は手を上げた。我がグループから続くと期待したが隣のグループの二人が出てきて定員一杯だ。

ドン、ドドドン、ドーン。ドン、ドドドン、ドーン。調子がいい、すぐにのれた。

「次の方いかがですか」 また案内人が呼びかけた。

誰の声もない。

「高橋！いけ！」

「.....」

ぐずぐずしている、

「おい、いけ」

「はあ～い」

ようやく腰を上げた。応募は一人だけだった。

ドン、ドドドン、ド～ン。 いい調子じゃない。

ドン、ドドドン、ド～ン。 いけてるよ。

ドン、ドドドン、ド～ン。ドン、ドドドン、ド～ン。あれあれ、本調子だね。



今一度の津軽三味線を聴いた。こちらの演者は全国大会の優勝者であったが高橋には昨夜の臨場感が余計にあって、昨日の方が印象に残ったみたいだ。循環100円バスに乗って駅まで戻る。もう、昼食の時間だ。この頃になるとお腹も疲れがでているのか軽食がいい。麺類が適当だ。だが、ない。あちこち探し回り、しょうがない、駅前の夜は居酒屋屋は定食屋らしき店に入る。麺類はなし。ええい、「鯖の味噌煮定食」でいいよ。

## 12 青森空港より羽田空港へ

島田とは弘前駅前で別れリムジンバスで青森空港に行く。海沿いでなく、山の上にある空港だ。よく霧が出て飛行機が引き返すときもある。この日は問題なし。

空港の売店で土産を買う。奥様用だ。高橋には奥様の許しがなくては食べてはいけないよと念を押した。ようかんとりんご形のお菓子だ。高橋が定年まで勤め上げてくれたのは半分は奥様の協力があったからだ。奥様には感謝、感謝だ。そして、今回は高橋には往きの東京駅までの交通費以外は支出をさせないというのが代市Pと打ち合わせた方針だ。

6/16(木)14:10定刻にテイクオフ。15:20羽田着。  
私の車が迎えに来ている。高橋も同乗。湾岸から第三京浜国道を通り、道順から我が家に先により高橋家まで。かくて旅は終わる。

### 13 大過なく勤め上げる

ずいぶん盛り沢山の思い出づくりだったが、高橋にはどう感じたのだろうか。旅のあちこちで高橋の目がなくなるばかりの笑顔を見た。いかにも人がよく誠実さのにじみ出る笑顔だった。そういう人としての信頼感が彼の36年間を後押ししていたのだろう。

私は若い頃「大過なく勤める」という言葉に引っかかるものを感じた。積極性の欠如を思った。しかし自分の経験もふくめ、今になって考えると、仕事で、人生で、何もなく過ぎるなんてありえない。必ず何かが起きている。他人からは見えなくても、それは誰かが何もないように処置していたからだ。そこには大変な努力があったはずだ。高橋のスタンドプレーのない一見地味な仕事ぶりには、彼の先輩岸本に通ずるものがある。私達は「大過なく勤め上げた」といって、「高橋へのありがとう」という言葉に代えたい。

